

---

# **日常 -涼風 優莉の場合 -**

悠月 香夏子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

日常 -涼風 優莉の場合 -

### 【Zコード】

Z3256U

### 【作者名】

悠月 香夏子

### 【あらすじ】

先輩にしてるボクの恋は、  
神様の気まぐれによつて  
とんでもない方向にいくのでした。

それが、私の『日常』。

## 日常1『先輩と私』

ボクは、先輩に恋をしています。

部活の先輩。

メガネで、Sで、折り紙ばつか折つてるけど  
本当は優しい先輩。

ボクの事なんか眼中に無いって分かってるナビ……。

この物語は、そんな私達の非日常的ラブコメです。

「あ、優莉ちゃんだ。おはよ～」

……のんきに手を振つてくる彼が、ボクの好きな人。

「おはよついじります、ゆつきー先輩。」

彼の名前は浅羽 幸村。あさはね ゆきむらあだ名はゆつきー。

一個上で、いまいち何考えてるかつかめない人だけど

ボクは、大好き。

「そういえばさ、優莉ちゃん給食委員でしょ？」

「あ、はい！」

「俺が委員長でびっくりしたでしょ」

「はい、とっても」

こんなやつて、ボク達は『ゆるゆる会話』ばつかやつてる。

恋に発展するわけがない。

あ、ボクの紹介がまだでした。

ボクの名前は涼風優莉。すずかぜ ゆうり

14歳、中学2年生。所謂ボクつ娘で、だぜつ娘で、

ヤンデレで、妹の力オスな性格。

演劇部所属。

ちなみにゆつきー先輩と知り合ったのは演劇部のおかげ。  
これだけは、運命に感謝するとしますか。

「それじゃ、またあとで。」

「はい、それでは……」

……ボクに勇気がないのが悪い。

「これからどうしようかなー」

のんきなのも今のうちだ。

## 口常1　『先輩と私』（後書き）

私としては一作目になる新作恋愛小説やつと書けました！――！  
またしても先輩との恋です。

恋愛は楽しいなツツ（笑）

読んでいただけたら幸いです。

## 日常2『急展開』

ある晴れた日の夕方、衝撃の報告がボクの耳に入った。

「離婚した。

お前達は俺とあいつの好きなほうについて行けばいい。」

……はい？ 異婚？

あー、離婚ってあれ？ 円満だった夫婦があるきっかけで別れてしまうこと。

……なにやつてんのこの人達。

最近一緒にいないなあとか思つてたらなるほどね、離婚か。好きなほうについて行けつて事は親権は剥奪されてなかつたつて事ね。

詳しく述べられないけど。

ボクは迷わず父を選んだ。

しかし、この選択が後に大きな不幸（幸福）を運んでくる事をボクはまだ知らない。

## 口常2 「急展開」（後書き）

まさかの展開でしたが（笑）  
承的には早かつたですね

お読みいただきありがとうございました。

6月24日 悠月 香夏子

## □章3『引越し』

「おー、優莉。」

「……なに?」

「明日、引っ越しすゞ。」

「引っ越しすつて……ど」「ん?」

「俺の不倫相手の家。」

……何やつてんだよこの人。

離婚の原因不倫!?  
しかもお父さん!?

「とにかく、明日だ。荷物まとめておけよ。」

「……うん。」

えーっと……なにこれ?ゲーム?

\* \* \*

……原因是不倫か。あー、もうちょっと泣きそだよッ!!  
「明日引越ししか~。もうちょっと詳しく聞いておけばよかつた。」

不倫相手にも子供とかいるのかな。

同じくらいだつたらいいな。ついでにいふと女の子で。

本当の兄弟、全員男だつたし。

「まあいいや。いろいろ考えたつて明日になれば分かるんだから、  
さつをと寝ちやおーっと。」

パチリ。

電気を消して、ボクはすぐに寝てしまいました。

いろいろありすぎて疲れていたから……。

明日になつたらボクの全てが変わつてしまひのこ。  
穏やかで平和な日常は、今まで。

日常3 『引越し』（後書き）

引越しです。

この後の展開はまあご想像に（笑）  
結構短いですね、私の小説つて。  
次は長めに書いてみるぞー！

6月24日 悠月 香夏子

## 日常4 「顔合わせ」

「準備できたかー?」

「う、うん。多分平気。」

「忘れ物しても取りに来れないからな。」

「げッ。何それ。」

「とにかく、早く行くぞ。」

「はいはい……。」

何も知らずにつれて来られた場所は、  
3階建てのマンションだった。

お父さんが邪魔で苗字が見えない……。

103号室の前で止まり、インターホンを押してみた。

可愛らしい女の人の声。

どんな人なんだろう……。

ガチャ。

扉が開く。出てきたのは……。

見た目20代後半くらいの若い女の人だった。

黒髪で目がくりくりしていて、一言で言つならば、「可愛い」が似合うのだろう。

ボクとは正反対だ。

「あら? あなた。そちらの可愛いお嬢さんは?」

「俺の娘だ。」

「そう。今日からよろしくね。えーっと、名前は……。」

「優莉です。涼風 優莉。」

「優莉ちゃんか。よろしくね。」

「あ、はい……。」

「とりあえず家中へ入つて。ビリヤ。」

意外とファンシーな内装だった。

いたるところに可愛い人形が置かれており、写真も飾つてあった。

通されたのはリビングだつた。

座つてどうぞと言われたテーブルの上には、ダイニングと兼用しているのか台ふきんとサラダが置いてある。さつと片付けでもしていたのだろう。

「あら、『めんなさいね。さつき朝食を食べていたから……』。少し照れた様子でテーブルを片付け始めた。コップに麦茶を注ぎいれて前に置いてくれた。

（飲む気には早々なれなかつたが）

彼女が椅子に座つたので私は聞いてみた。

「ねえ、あの……、あなたの事なんて呼べばいいのですか？」

「そんな、いいのよ。氣を使わなくて。家族なんだから。」

## 『家族』

彼女から軽薄に告げられたたつた一言の単語が頭から離れなくなつた。

家族になるの？そりや、そうだよね。分かつてた。

「イキナリ『お母さん』は氣がひけるから、名前でもいい……のかな？」

「え、ええ。私は智恵子です。」

「じゃあ、智恵子さんだ。よろしく。私はなんて呼んでもいいか

う。」

「分かつたわ。そういうばね、私にも中3の息子がいるんだけど、今日はどこか出かけてるみたいだから、後で紹介するわね。」

「分かりました。」

智恵子さん、か。

イキナリお母さんとはさすがに言えないなあ。

素性不明だし。よく分からないし。

中3の息子か。じゃあお兄ちゃん？

私にも血が繋がっていないとは言えお兄ちゃんができるのかあ……

「智恵子、優莉を部屋までつれてってあげてくれ。」

「はいはい。優莉ちゃん、こっちおこで。」

「？」

「あなたのお兄ちゃんと一緒に部屋なんだけど、  
そんなに狭くはないし充分でしょう。」

つれて来られた部屋は、なんとも言えない部屋だった。  
白い壁に白い床。小さいテーブルが中央に置かれ、  
端っこには白いベッド。ダブルくらいの大きさ？

「この部屋を、中3の人と……？」

「ええ、そう。今は白を基調の家具を置いているけど、  
そろそろ変えようと思つていたところだから、  
優莉ちゃんも欲しい家具が合つたら言つてね。息子と話し合つ必要  
があるけど……。」

それと、ベッドは2つも置けないから一人で一緒に寝てね。」

「分かりました。」

え、一人で寝る！？

ちょうどそこへ荷物が届いた。

自分の荷物を整理しながら中3の人の事を考えていた。

どんな人だろ。話があつ人ならだれでもいいや……。

\* \* \*

「そういうや今日誰か来るんだっけな。母さんからは  
早く帰つてこいつて言われたし、さつとと帰るか。」

え、お兄ちゃん？

□章4 「顔合わせ」（後書き）

次回、お兄ちやんが来ますよーーー！  
ぜひとも楽しみにしていてくださいませ。

6月25日 悠月 香夏子

俺は朝から騒がしい母さんを横目に朝食をとっていた。  
コンソメスープを飲もうとカップを口に運んでいる最中に  
母さんが「今日は家族が増えるよ~。」と言っていた。  
父さんが家を出て行つてからもつ3年になる。  
俺が小6の時、夜中に水を飲みに行こうとしたときに  
遭遇してしまつた。

父さんと母さんが喧嘩をしているところに。

最初は口喧嘩くらいだつたのだが、  
次第に大声になつてあたりの静寂は消えるほどだつた。  
ところどころ聞こえる声には、

恐ろしい言葉ばかりだつた。

俺はのどが渴いていたことも忘れただだ呆然と立ちつくしていた。

幸せだと思っていたのに。

そのうち、父さんはこゝそとばかりに棚からキャリーバッグを持  
つて

家を出て行つてしまつた。

泣きじゃくれる母さんを初めて見た。

俺はあの時動けなかつたんだよな。

母さんは俺が見ていたとも知らずに父さんは出張に出かけたと言  
つた。

あの日から、孤独を感じるよになつた。

真つ暗で一人ぼっちな感覚が……。

そんな事を考えながら俺は家へ帰る。

母さんの言つていた「新しい家族」に少しばかりの期待を寄せてい  
た。

俺を孤独から救い出してくれるんじゃないかつて。

ガチャリ

扉を開けて、玄関へ入る。

そこにいたのは……。

「優莉ちゃん?」「先輩?」

□章5　『幸村君の視点』（後書き）

どうでしたかね～？  
やっぱりかつていう読者の方が多いのではないのでしょうか（笑）  
次当たりで、いちや、いちやなってこきます。  
よろしくお願ひします。

6月27日 悠月 香夏子

## 日常6 「驚きと戸惑い。」

確かに、それはゆつきー先輩だった。

細い黒ぶちのメガネ、見ていて飽きない顔、優しい眼差し……。  
それをとっても、確かにゆつきー先輩だった。

「どうしてここに？」

「どうしてつて……ここ、俺ん家。」

「ええ！」

私は、神様に遊ばれているのだろうか？  
こんな変な偶然、そうとしか思えない。

\* \* \*

「あら、帰つてきてたの。」

「うん、ただいま。」

「そういうばね、今日からここに住む……」

いやあああ！！！

二人が話しているのが見える。

パニック状態の私をよそに、目の前に来たその人がいた。

「涼風優莉ちゃんよ。」

「ああ、知つてる、俺の後輩。」

「えつと……よろしくお願ひします。」

「さて、全員揃つたところで夕食にしましょうか。」  
智恵子さんはそう言って夕食の支度を始めた。

神様、ボクはいつたいどうすればいいのでしょうか？

## 口算7　『氣まずい夕食』

新しい『家族』との初めての食事は一言で言つて、  
あ、氣まずい……。

空氣で人が殺せると心底思つたくらいに。

どうしよう。この飯の味がわからなー……。

鶴恵子さんと父さんは楽しそうに話している。  
ボクとゆつきー先輩は黙々と夕食を食べた。

「もうこいや。」ちやうさお。

「あら、優莉ちゃん、もうこいの？」

「いい。美味しかったよ。もうお風呂入つて寝ます。」

「そつ……わかつたわ。幸村、案内してあげて。」

「……ねり。」

ぬ、ぬぬぬ、ゆつきー先輩！？

どうしよう。ボクってば、この人のこと好きなんだよ？！

「優莉ちゃん、こつちだよー。」

「は、はい！ー！」

あーあ、声が裏返つちゃつた。

「優莉ちゃん、いひちおいで。」

「は、はい…。」

若干緊張しつつもゆつきー先輩の後をついて行く。

大きい背中だな…。

「はい、ここ。

タオルとかは入ってるから、好きに使ってね。  
それじゃ。」

「わかりました！！！」

「おー、いい返事。」

そう言つて先輩は私の頭をなでた。

「／＼／＼！…」

…びっくりした…。

頭なんて部活でなでられたりしてるので。  
いつもと違うドキドキなのは、きっとこの場所が先輩の家だから。  
そして、ボクと先輩はもう？家族？だから…。

「家族、か。」

ゆつたりとした湯船に肩まで浸かりながら  
ボクは考えていた。

ここ数日の出来事を。

離婚が成立して、ここに引っ越し越してきて、  
ゆつきー先輩と同じだとわかつて、ボクの生活は一変した。

「ふふつ、とんでもない偶然だな。」

ぼそっと呟いてからお風呂を出た。

お風呂から上ると、テーブルは綺麗に片付いていた。

\* \* \*

「あら、お風呂上がったの？」

「じゃあ次、私が入ろうかな。」

「はい、どうぞ。」

適当に返事をした後、ボクはついに兄妹の部屋へ入った。

「ああ、お風呂上がったの。」

「は、はー…。」

「ところで、さあ。

優莉ちゃん、どうして寝る？』

「え？」

「いや、だからわ、床で寝るか、ベッドで寝るか。』

「ああ、そうですねえ。ボクは…床でいいですよ。いじめか！－！」

さすがに先輩相手でベッドには寝られない。

でも床か…。痛そうだな。

「ああ、そう？」

一緒に寝てもよかつたのに。』

いたずらっぽい笑顔でそう言われた。

「ええ？！」

「冗談だよ。じゃあ、もう寝ようか。

明日も早いよ。』

「ああ、はい。そうですよね。』

「うん。それじゃ…あ、もう一つ言わないといけないことがあるつた。』

「…………？」

「呼び名、ゆつきー先輩だとなんか居心地悪いから、ほかの名前で呼んで？俺は優莉って呼ぶからさ。』

？優莉？つて初めて呼ばれて、心がくすぐつたいたい…。

「ええーっと…にーさま。にーさまがいい。』

「にーさまか…まあいいかな？じゃあそれで。』

「の呼び名は、ボクがハマっている？神の巫女知る世界？の巫

女が

主人公を呼ぶときの名前。

「じゃ、おやすみ、優莉。」

「あ、はい！おやすみなさい、にーさま…。」

……なんて幸せなんだ。

日常8　『一人きりの夜。』（後書き）

お久しぶりです！！！

悠月 香夏子です。

日常、まだまだ続きます！！！

次回をお楽しみに…。

11月04日 悠月 香夏子

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3256u/>

---

日常 - 涼風 優莉の場合 -

2011年11月12日12時48分発行